

# Marine Turtler

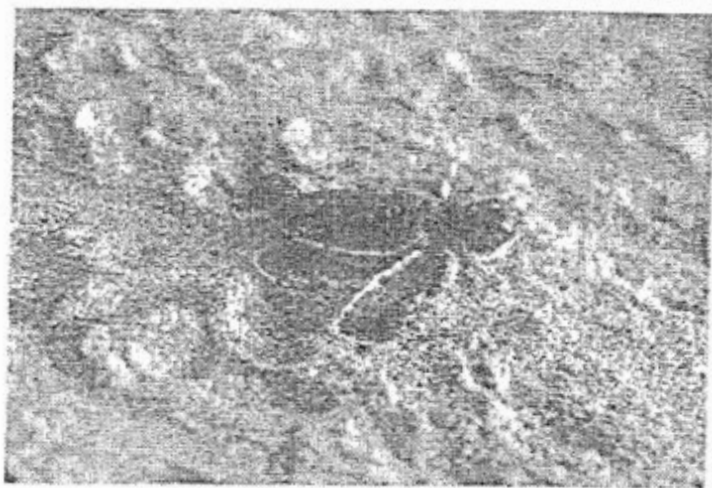


## ウミガメ

第1号

2001年10月15日

特定非営利活動法人 日本ウミガメ協議会 機関誌



## しあいのこ

会長 亀崎直樹

日本ウミガメ協議会最初の会報をお届けします。会報の名称、マリン・タートル (Marine Turtle) は、英和辞典には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とはいえません。ただし、米国では最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。

ウミガメを守りたい人も、ウミガメを研究したい人も、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人も、単にウミガメが好きなの人も、ウミガメに関わるすべての人を、我々はマリン・タートルと呼ぶことを提唱したいと思っています。これまで内輪でウミガメの保護や研究をしている人に対して「ウミガメ屋」という呼び方がありましたが、それより少し広義なもの、具体的には単にウミガメが好きなの人や砂浜が好きだという人も加えた人間集団です。

当会は1990年、全国各地のウミガメ屋が集まり発足しました。以後、年一回のウミガメ会議を各地で開催し、情

報交換を行うとともに、協力して日本のウミガメの生態を解明してきました。

今では日本のウミガメの産卵の大部分は把握されていますし、一万以上の個体に付けた標識は彼らの回遊行動の一端を明らかにしました。それまで、漠然としかわからなかった産卵回数の変化や保護に重要な海域などが認識できるようになり、ようやく地に足を付けた議論ができるようになってきました。

今後大きな問題となるのは、日本各地でウミガメの保護活動をする人間の集まりの中で、我々が皆さんにどのような貢献ができるのかということです。

この点については、全国で実際にウミガメにたずさわる人には、情報の提供や専門知識の提供など「便利屋」として使っていたらだいたいと思っています。一方、実際に砂浜で保護や研究に携わらなくても、ウミガメに関わっている人々を、技術的、精神的、経済的に支援する人たちのネットワーク (STS members) の形成を目指します。STS members の方々には日本のウミガメについての情報を紹介することで、砂浜

やウミガメのおかれた状況を知ってもらい、それぞれの専門の立場から適切なアドバイスをいただきたいと思っています。また、会費収入で活動費を得ることもフェアな活動を保つ意味から重要です。

将来は、STS members の方々から地域のウミガメの研究や保護に何らかの形で関わっていただけるようなことも考えたいと思っています。従って、日本ウミガメ協議会は砂浜やウミガメの保護や研究に携わる人々と、それを理解し支援する人々の集まりと考えてください。

皆さんもご存知のように日本の砂浜は、これまで実に安易な議論のもとに、ことごとく破壊され、現在もそれは続いています。ウミガメはその砂浜の自然度の指標となる動物です。人々に自然の恵みと心の潤いを与えてくれる砂浜やウミガメのことを、多くの立場の人間が集まってちゃんと議論し、将来に悔いを残さないようにしようじゃありませんか。できる限り多くの分野の方々の入会をお願いします。

## ウミガメ講座

ウミガメのことを知ろうと思っても良い教科書がないという声を聞きます。また、ウミガメの生物学もほとんど進歩していません。このコーナーでは皆さんの興味のあるテーマについて、専門の人間がやさしく解説していく予定です。

### 第一回

#### 子ガメが夜に脱出するしくみ



巢穴から脱出する子ガメ

ウミガメはその名の通り生涯を海で過ごす海洋動物ですが、その一生は地中動物として始まります。

砂の中に産みおとされた卵から、早ければ産卵後四十日あまり、遅くて

も八十日ほどで子ガメが孵化します。砂の中で生まれた子ガメは生き埋めになってしまふことなく、数日後には地表に脱出してきます。巢穴は地表から 50cm ほど下にあります。一説には砂浜にできた車の轍を乗り越えられないとも言われる子ガメが、そんなに深いところからどのようにして脱出してくるのでしょうか？

孵化直前の卵の中で、半分は子ガメが占めています。残りの半分は羊水や老廃物を含む水分です。子ガメが卵の殻を破って外に出るときに、この水分は下へこぼれ、卵の殻は潰れてしまうので、巢穴の中には余分な空間ができるわけです。子ガメが動き出すと、天井の砂が徐々に崩れ落ちます。その中を這い上がって、子ガメは上へ上へと移動していくのです。

地表へ向かった子ガメは、闇雲に掘り進むわけではありません。多くの

場合は、10cm ほどの深さまで到達すると一旦そこで待機します。そして、夜になると一斉に脱出するので、フロリダの海岸で地表への脱出のタイミングについて詳しく調べた例によると、約四分の三の脱出は、午後十時から午前二時までで起こっていました。例外的に大雨が降った後には日中でも脱出することもあり、特に雨が多い屋久島ではこのようなことが頻繁に起こりますが、基本的に子ガメは夜に脱出します。なぜ、昼間ではなく夜なのでしょうか？

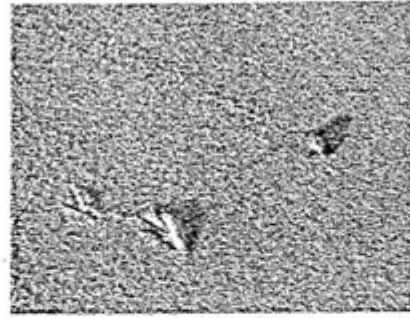
昼間、砂浜の表面は  $50^{\circ}\text{C}$  以上に子ガメを待ち伏せるカラス

もなります。仮に子ガメが昼間に地表に脱出してしまったら、波打ち際にたどり



着く前に暑さのために死んでしまうでしょう。また、昼間は、目がよく利く大型の捕食者が空からも海からも子ガメを狙っています。

昼間、カラスに襲われた子ガメ



子ガメが夜間に脱出するようになつたのは、このように昼間は生存のため

めに不利な条件ばかり揃うからだと考えられています。では、子ガメは砂の中で、どのように脱出のタイミングを見計らうのでしょうか？

ヒントは、通常は夜間だけに、そして大雨の直後には昼間でも脱出することがあるという点にあります。両

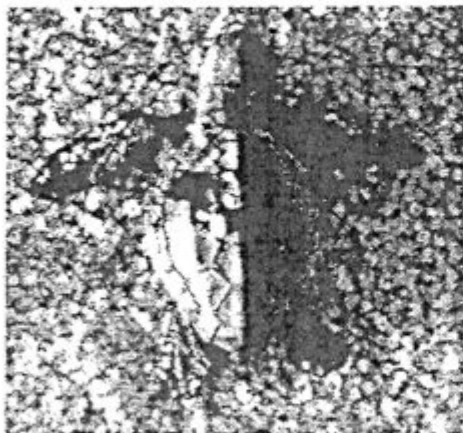
者に共通することは、地表近くの温度の低下です。実際に、アカウミガメの脱出が起こる時の砂の温度を詳しく調べた例によると、地表の温度が32.4℃以上であることはほとんどなく、最も多かったのは、これより僅かに低い温度の時でした。また別の研究では、子ガメは周囲の温度が高いと、その活動性が著しく低下することが分かっています。子ガメは、砂の温度が熱い状態を嫌い、周囲が適度に涼しくなることを手がかりに脱出のタイミングを見計らっているのです。

夏、ウミガメの産卵地の砂浜には、いろんな人がやって来ます。大勢仲間を引き連れてきて、ウミガメについていろいろと説明をはじめた人も少なくありません。何食わぬ顔で聞いていると、「ウミガメは、産卵された時と同じ時間にかえるから、子ガメを見たかったら、産卵したときの時刻

を覚えておくといい。」とか、「ウミガメの赤ちゃんは、大潮の満潮になると砂から出てきて海に向かうんだ。」と言う珍説も飛び出します。みなさんは、どんな珍説を聞いたことがありますか？

研究員 松沢慶将

カラスに突かれ甲羅に穴が開いた子ガメ



## 小笠原海洋センターの紹介

日本ウミガメ協議会は、小笠原村から小笠原海洋センターの運営を委託されています。小笠原といえばアオウミガメ。その活動の様子を近藤鉄也がご紹介します。

小笠原海洋センターは、一九八二年に財団法人東京都海洋環境保全協会によって、小笠原村父島宇屏風谷に博物館相当施設として開設されました。父島は今でこそ日本最大のアオウミガメの産卵地として名を馳せていますが、開設当時は一年にわずか一〇〇回前後しか産卵が行われず、まさに絶滅の危機に瀕していました。離島である小笠原にとってアオウミガメは貴重な蛋白源であり、乱獲によって個体群が激減していたのです。「減少するアオウミガメを保護し、

増養殖をすることによって絶滅を防ぐ」を主目的とし、開始から今年三月までに人工孵化及び短期育成によって放流された稚ガメは十六万頭を超え、その一部は千葉県、高知県、鹿児島県など日本列島の太平洋岸で確認されています。捕獲頭数の規制も効果を上げ、この三年間（1988～2000年）は毎年六百回以上の産卵が確認されています。加えて冬に出産・子育てに来るザトウクジラの調査も十年ほど前から行っています。

財団法人の解散に伴い、海洋センターは村に譲渡され、四月から日本ウミガメ協議会が施設の管理・運営を受託することになりました。職員二名が常駐し、ウミガメを通しての地域住民とのふれあい、観光客等への啓蒙

活動、アオウミガメの飼育・調査ボランティア及びザトウクジラの調査ボランティアの育成が主な内容です。アオウミガメの調査は五～十一月、ザトウクジラの調査は十二～五月に行い、アオウミガメの飼育は通年のため、年中多忙な施設です。

皆さんも一度ボランティア活動に参加されてみてはいかがでしょうか？

研究員 近藤鉄也



小笠原でのアオウミガメの産卵

## インドネシア便り

日本ウミガメ協議会では海外のNGOとも協力して、ウミガメの調査や保護活動を行っています。力を入れているのは、世界でも有数のウミガメ生息地インドネシアです。その活動を紹介します。

### 「ヤヤサン」とは？

日本ウミガメ協議会ではインドネシアのウミガメを守る活動も行っています。日本とは文化や風習、人々の価値観も異なるインドネシアで常に予期せぬ障害に立ち向かっていくには現地NGOとの協力が不可欠となります。現在その協力団体となっているのが「ヤヤサン」の愛称で呼ばれるインドネシアウミガメ研究センター (Yayasan Alam Lestari - Pusat Penelitian Penyu Indonesia) です。人の名前を呼んでいるように

も聞こえる「ヤヤサン」とは実はインドネシア語で「財団」の意味で、インドネシアでは環境や福祉の活動をする「ヤヤサン」のほか、病院や学校を経営する「ヤヤサン」も存在しており、日本でいう財団よりも広い意味で使われています。

インドネシアウミガメ研究センターは現在四名の職員、約三十名の現地監視員から成り立っています。代表を務めるアキルさんは日本への留学経験を持ち、流暢な日本語も話す一方でインドネシア共和国科学技術省の鉱物専門家という肩書きを持ちます。亀崎や菅沼の調査に翻訳として同行していたのがきっかけでウミガメに魅了されたしまったアキルさん、今ではどちらが本職か分からないくらいの熱の入れようです。現在、当協

議会とヤヤサンではジャワ海のタイマイやアオウミガメ、イリアンジャヤのオサガメなどの保護を行っています。活動は四年目を迎える順調に進捗している反面、海賊出現や石油会社によるウミガメ保護地の買収騒ぎ、監視員の病気なども次々に巻き起こる問題に悩みの種も尽きません。

研究員 田中真一



ヤヤサンの面々。保護活動地の1つセガマ・ブサル島にて。中央が代表のアキルさん、右端が菅沼、左から2番目が田中

## 奄美便り

日本ウミガメ協議会には、各地に住みついてウミガメの調査を行うボランティア調査員がいます。その中の一人、奄美大島でハブの出る屋敷を借りて調査をしている水野康次郎に、その活動を紹介してもらいます。

### 調査員活動報告

私は日本ウミガメ協議会から奄美大島に派遣され、さまざまな活動を行っています。

#### 一、ウミガメの産卵実数調査

昨年度から奄美大島において、ウミガメの産卵実数調査を行っています。現在、奄美大島（瀬戸内町阿木名）に滞在し、主に奄美大島・加計呂間島・請島・与路島を調査しています。また今年から徳之島・沖永良部島・与論島も調査しました。

#### 二、浜の数調べ

奄美大島において、これまではつきりとした砂浜の数が確認されていなかったため、砂浜の数を調べました。地図を作成し、それらの確認された砂浜にナンバーを付けていきました。

#### 三、聞き取り調査

地元の方々とお会いして（特にご年配の方）その土地のウミガメに関する話や、昔の生活等を教えてもらいます。また役場などに行き、ウミガメの担当者から情報を得ます。

#### 四、混獲されるウミガメ類の保護、調査

定置網・刺網等で混獲されたウミガメの数やサイズ、種類などを記録し、標識をつけて放流します。

#### 五、日本ウミガメ協議会の広報活動

パンフレットの配布と会員勧誘、また日本ウミガメ協議会の周知活動をを行っています。

#### 六、地元の人との交流

現在、瀬戸内町で小中学生に柔道を指導しています。（ちなみに私は三段）また、体育大会などにも積極的に参加しています。

調査員 水野康次郎

#### 編集部注

水野君は昨年の県大会地区予選で優勝し、本大会にも出場しています。



奄美大島の自宅玄関にて  
右は亀崎会長

## ウミガメ協議会活動報告

この一年間で行った活動のうち、主なものを記載しています。

### 二〇〇〇年

十一月・第十一回日本ウミガメ会議(牛深会議)開催

### 二〇〇一年

三月・国際ウミガメシンポジウム(アメリカ)参加(菅沼・宮形)

・インドネシア調査(菅沼・田中)

四月・東京事務所・小笠原事務所開設

・インドネシアの保護監視員、ヘンギさんの眼病治療費募金開始

・大阪コミュニケーションアート専門学校(OCA)と教育サポート契約を結ぶ。週2コマの講義開始

五月・ヘンギさん手術成功、両眼の視力回復、募金総額三十万円

・実習生の研修受入れ開始(小笠原海洋センター)

七月・ウミガメ協議会、大阪府から内閣府に認証官庁変更

・豊橋市ストランディング調査(通



死んで打ち上がったオサガメ(豊橋)

事・京都大学島田・細・東樹)

・島根県大社町ストランディング調査(京都大学島田・西村)

・茨城県鉾田町ストランディング調査(菅沼・田中)

・インドネシア調査(菅沼・田中)

・種子島調査(鹿児島大学稲谷)

・奄美大島で講演会開催(亀崎)

・茨城県波崎町ストランディング調査(菅沼・田中・松下)

八月

九月・グランドケイマン・キューバ出

張(松沢)

・ベトナム調査(菅沼・田中)

・天草で講演会開催(亀崎)

・高知でアカウミガメ三頭にアルゴス発信機をつけて放流



放流前に池から揚げているところ



装着されたアルゴス発信機



## ウミガメ協議会

### 会員の名称について

日本ウミガメ協議会は、NPO法人格取得以来、会員を募っていましたが、このたび会員名称を正式に決定し、STSメンバーズと名付けました。(STS=Sea Turtle Support の略)

日本ウミガメ協議会の事業年度は、毎年十一月一日から翌年十月三十日までとなっております。またSTSメンバーズとなっていない会員の皆様は次の年度より、このSTSメンバーズとして登録させていただきます。

新しい入会案内を同封致しますので、ご覧下さい。(改めて入会申請いただく必要はありません。よろしければお近くの方にご案内下さい)

なお、次年度会費を未納の方には、会費振込用紙を同封致しておりますので、十月末日までに振込をお願い致します。(振込手数料は無料です)

### これからの予定


十一月十六日から十八日に、宮崎県高鍋町にて第十二回日本ウミガメ会議を開催します。今回は宮崎県野生動物研究会、高鍋町、高鍋町教育委員会との共催です。海外招待講演者は、サンディエゴ、ハップスシーワールド水族館のスコット・エックカート博士に決定しました。また、特別講演として、『宮崎のウミガメの歩み』『高鍋湿原の歴史』『高鍋のウミガメ』、高鍋町堀之内海岸の視察などを予定しています。参加申込は事務局までお願いします。

来年度は、引き続き日本全国のウミガメ産卵状況の調査と情報収集、各地でのウミガメに関する講演会の開催、インドネシア、ベトナム、モルジブのウミガメ調査と保護活動を予定しています。

### 頒布品のご案内(書籍)

- |                           |               |
|---------------------------|---------------|
| 1. ウミガメは減っているか～その保護と未来～   | ¥2,100        |
| 紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会共編 |               |
| 2. 日本のウミガメの産卵地            | ¥2,100        |
| 日本ウミガメ協議会発行               |               |
| 3. うみがめニュースレター No.1~47    | 会員価格 ¥7,000   |
| うみがめニュースレター編集委員会発行        | (一般価格 ¥9,000) |
| 4. 岩波現代日本生物誌 イルカとウミガメ     | ¥1,995        |
| 亀崎直樹・吉岡基共著                |               |
| 5. ウミガメの旅 太平洋2万キロ         | ¥997          |
| 香原知志著 亀崎直樹監修              |               |

頒布品のご案内（その他）

- |                    |   |        |
|--------------------|---|--------|
| 1. アカウミガメピンバッチ     |  | ¥300   |
| 2. アオウミガメピンバッチ     |   | ¥300   |
| 3. ウミガメ協議会ステッカー    |   | ¥300   |
| 4. 小笠原海洋センター特製Tシャツ | 図柄 胸ポケット  | ¥2,800 |
| 5. 同               | 図柄 中央子ガメ  | ¥2,500 |



近日予定＝タイマイピンバッチ、アカウミガメ携帯ストラップ、etc...

左写真の上が5、下が4です。

書籍、その他ともお問い合わせ、申込は事務局までお願いします。

機関紙を出さなければ、出さなければと思いつつ、とうとう今までかかってしまいました。これからは定期的に発行できるように、日頃から記事をためておくように心がけます。また、皆さんからの投稿もお待ちしています。

編集後記



歴久島にて 会員の工藤宏美さん

調査のひよつこ  
孵化の終わった産卵巣を掘り、卵の殻を調べています。

マリン タートル（日本ウミガメ協議会機関誌）

発行 日本ウミガメ協議会事務局

発行日 2001年10月15日

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町 5-17-18-302

電話：072-864-0335 FAX：072-864-0535

URL <http://umigame.org> E-mail [info@umigame.org](mailto:info@umigame.org)